

エー  
A  
ジー  
G  
ファイブ  
5  
だよ

## 現地の日本語学校・日系人社会への支援

アスンシオン日本人学校 校長 加藤雅亮

パラグアイの日系移民は、スタートこそ1936年ですが、その後は戦後の移民が多く、比較的新しい移民の地であると言えます。そのため、移民一世の方もいます。当時は様々な苦勞があったようですが、先人たちのたいへんな努力により、パラグアイでは日本人が敬意をもたれています。「日本人は口約束でも金を払う」「今まで日本人はパラグアイで人殺しを一度もしていない」という表現で、日本人への信頼を表すパラグアイ人もいます。そのような環境のなかで、本校は「日本文化の発信拠点」として、現地の地域社会に貢献できる存在になることを目指しています。



## パラグアイの日系人社会

パラグアイの日系移民の大きな特徴は、日系人同士の結婚が多く、子どもたちが生活の中で日本文化に接したり日本語を話したりする環境がまだある、ということです。

国内には六つの移住地と三つの都市に、日本人会が支援する日本語学校が計九校あり、それぞれの地区で日本語や日本文化の継承に尽力しています。そのためパラグアイでは、他の南米の国々に比べて高い日本語力が維持されていると聞きます。

しかし、日系四世が誕生し始めている昨今では、その将来を不安視する方もいます。子どもたちは親とは日本語で話しても、日常の主たる言語はスペイン語となり、思考の根幹をなす言語(母語)がスペイン語である子どもたちも少なくありません。すでに「日本人」という意識よりも「日系パラグアイ人」という気持ちの方が強くなっています。

そうした中、「五世以降で日本語が途絶えてしまうのなら、今、必死に日本語を継承しようとする意味はあるのか」と悩みながら、それでも若者たちへ継承しようとする努力されている方の声も聞きました。日本語や日本文化の継承および日本型教育の

発信・普及は、日本への理解者・応援者を増やすことにもなり、日本にとっても有意義なことです。ここに私たち日本人学校が彼らを支援するべき理由があります。

日系日本人会による日本語の作文コンクールやスピーチコンテストの審査員を、私は立場上、依頼されます。スピーチコンテストでは、パラグアイ全土から代表の児童生徒が集まってきました。その表現は豊かであり、たいへん丁寧な日本語です。またスピーチの内容は、日本人の若者と変わらない気持ちを表現しているものもあれば、日本の若者よりもずっと素直な感性ではないかと思わされるものもあります。

一方、日本人とは異なる感覚の中で生活していることを感じさせるものもありました。一例を挙げます。ある地方に住む女子中学生は「スマホがほしい」と思っていました。日本の中学生と同じです。しかし父親からプレゼントされたのは「バイク」。ちょっとがっかりしながらも、感謝する気持ちをスピーチで話しました。「これで農業を行う父親の仕事の手を止めさせずに、自分一人で学校へ行ける」と。こちらでも中学生は法的にはバイクは乗れません。しかし地方では許容されているよう

です。生活の足として必要なのでしょう。こうした話からも、日本とは異なる文化の中で育っている日系の子どもたちの様子が感じられます。

アスンシオンにおける  
AG5の在り方

二〇一七年度より、本校はAG5の研究提携校となりました。テーマは「日本文化発信の拠点形成プログラム開発」。その具体的な取り組みとしては、「日系人とその生活拠点であるコミュニティに対して日本型教育や日本文化を発信すること」であります。以前から現地の日系人社会と交流のあった本校ですが、この機会を与えていただいたことは、小規模の本校がさらに現地にとって必要な存在となり得るチャンスです。

本校は、現地校であるカンポベルデ校と交流を行っています。本年度も九月に二日間にわたって交流の機会をもちました。ここでは、日本の昔の遊びや浴衣を着る体験、日本の授業体験や習字体験などの場を設定しながら、日本文化の発信をしました。しかし本プロジェクトで行うべき「日本文化の発信」は、少し違うものであるべきだと考えます。

昨年度の本校における話し合いでは、日本の「教育文化(授業研究等)」

や「学校文化（規律・清掃活動等を含む）」こそ、発信すべき「日本文化」ではないか、という結論に至っていません。

今までも本校の運動会では、アスシオン日本語学校と他に三校（内二校は日系の学校）を招き、交流と日本の学校文化の発信を行ってきています。それに加えて、「授業における教授法」「子どもの意見を生かした授業の在り方」や、それに伴う「共通教材の開発」を、本プロジェクトで取り組んでいこう、ということになりました。そして、アスシオンの日系日本人会と最も関わりの深いアスシオン日本語学校（以下、「日本語学校」）を主な支援対象とすることにしました（日本語学校では日本語指導だけではなく、いくつかの教科についても授業を行っています）。

### 日本語学校への授業支援① — 本校での授業公開

七月に本校で、日本語学校との合同研修会が開かれました。本校の授業（国語・道徳・数学・英語）を日本語学校の教員に公開し、その後、分科会と全体会をもつ形で研修会を実施。授業には日本語学校の数名の児童も参加しました。

日本語学校の教員は、大型ディスプレイ



ディスプレイで教材を提示する国語の授業

プレーとパソコンを使っている教材提示の仕方に関心をもっていました。

また、国語だけでなく英語の授業についても「日本語を教えるのと共通した部分があり、テンポの良い授業展開は参考になった」とのコメントが寄せられました。

全体会では、授業の進め方についてのアドバイスを本校が行いました。本時の流れの見通しを子どもにももたせる。

- ・教師がしゃべりすぎない。
- ・発問や指示をいろいろな言葉で言い換えない。
- ・正解を言うのが教師の仕事ではなく、子ども同士の発言をつなげることが大切。

手を挙げていない子にも指名をし

て、意見を聞いたり何に困っているかを尋ねたりすると良い。

授業を行う上での基本について、伝える機会となりました。

一方、日本語学校の教員は「日本語指導についての悩み」を多くもっていることが協議会でも明らかになりました。しかし本校の教員には日本語適応指導教室等で日本語指導を経験した者はいません。指導経験はなくても、日本の大学等が作成しているリライアント教材や指導法の紹介など、日本の関係機関との橋渡しになることが、今後の私たちの課題となることを感じました。

### 日本語学校への授業支援② — 日本語学校での授業参観・合同授業

日本語学校では、火・水・金曜日の昼からの平日コースと土曜日コースがあります。私たちは、八月の平日コースの授業を参観しました。土曜日よりも少人数で、「日本語能力が比較的高い」との説明がありました。

前回の本校での授業に刺激を受け、黒板にプロジェクトでスライドを映しながら授業をしている学級がありました。また、学年が異なる子どもたちに応じた課題に取り組む学級がありました。一方、子どもが黒板

に答えを書いている途中でも、間違いを指摘してしまう光景も見られました。授業後の意見交換の場では、「正答をどんどん言う子に授業が引っ張られている傾向がある。他の理解できていない子が考える余裕もなく次に進んでいる。それぞれの子に発言の機会を与え、つまづいている子を見逃さないようにすることが大切」との助言が出されました。

また、この参観をきっかけに、授業力の向上を図るには、日本人学校教員による出前授業ではなく、両校教員が一緒に授業を作り上げる経験をした方がいいのではないかと、私たちは考えました。

そこで十月のある水曜日に、本校職員が日本語学校に向き、日本語学校の教員と二人ペアで一つの授業を行うことにしました。授業作りの工夫や、その面白さを日本語学校の教員に知ってほしいとの願いを込めて。しかし、その事前打ち合わせは時間的にとても困難で、日本語学校の教員の一部からは合同授業ではなく、すべて日本人学校にお任せの出前授業を希望するような発言が聞かれることもありました。そこで、共通理解を深めるため電話やメールで授業展開について話し合い、当日の授業前にも最終打ち合わせをして、

国語の授業に臨みました。

小学三年生は「姿を変えたる大豆」の授業。画像をいくつも提示し、子どもたちの理解を深めていました。しかし、「煎る」「煮る」などの調理の用語は、「写真だけでは伝わりにくかった」との反省も出されました。小学四年生は「茶摘み」の歌詞を情景や色に注目しながら理解し、一緒に歌う授業。そして、ひらがなばかりの歌詞に、知っている漢字を書いて貼っていく活動を行いました。少人数でしたが、大きな声で歌い、たくさん漢字を見つけてくれた子どもたち。音楽を取り入れて楽しく授業展開したことが、学習意欲を高めたと考えられます。

授業後の協議会では、「授業の工夫により、子どもたちが集中して取り組んでいた」「使用した資料映像などを次年度以降も生かして改良していくと良い」などの声が聞かれました。一方、日本語学校の教員から、複数の学年の子どもたちに同時に授業を行うことへの悩みが出されました。派遣教員でも複数学級経験者は多くなく、これについては私たちも学んでいかなければならない課題となりました。

また「一つの授業をみんなで見合い、その後、研究協議会をもつ」という

日本でよく行われている「授業研究」の実施について、日本語学校に投げかけてみました。世界で認められつつある日本の学校文化の一つです。

しかし、「自習になれていないので、担任が教室を離れて授業見学するのは難しい」「限られた時間しかなく、その中でやるべきことがいっぱいあるので、その体制が取れない」と否定的な反応が多く聞かれました。今後、本校の授業を見に来てもらう際に、そのような授業研究会がもてないか、検討していきたいと思えます。

**日本語学校への授業支援③**  
—日本語学校での習字・美術支援

日本語学校から、作品展に出品するので習字と美術の授業を支援してほしいという依頼が本校にありました。そこで十一月の土曜日に、二回にわたって本校の教員が指導の支援をしました。子どもたちは日本語学校の教員の指導により、かなりきれいな字が書いていました。今回は清書完成の支援でしたが、来年度は、筆の持ち方、姿勢、「はらい・はね・とめ」などの基本の指導に、最初から携われたら良いと、本校の教員は感じたいようです。次年度も支援を継続したいと思えます。

また、水墨画の指導も美術選択の



水墨画に挑戦する日本語学校生徒

生徒に行いました。「竹」を描く基本技術を学び、その後は簡単な水墨画のサンプルを見ながら、自分の作品を完成させました。墨の濃淡を使って表現することを生徒たちは楽しんでいました。

**共通教材の開発**

本校の子どもたちと日系の子どもたちにとって共通教材となり得るものの一つに、「移民」をテーマとした学習が挙げられます。現在、双方の子どもたちが移民について学べるように「移民すごろく」の制作を行っています。様々なクイズが用意されていて、それを通してパラグアイで移民について学べるようになっていきます。本年度、完成した際には、

パラグアイの各移住地にある日本語学校に贈りたいと思っています。また来年度には、社会科副読本を改訂しようと計画しています。パラグアイやアスンシオンについて、副読本を通して日本人学校の子どもの日系の子どもたちも学べます。社会科としてだけでなく、日本語の読みものとしても使えるような内容にする予定です。

**おわりに**

このプロジェクトを通して、様々な場で、日本人学校が現地の地域社会から頼られる存在になりつつあることを感じています。日本に帰国する子どもたちだけでなく、この地で生きていく日系の子どもたちに貢献できることは、私たちとしてもたいへん誇らしいことです。このような機会を与えていただきましたことを、深く感謝申し上げます。

本校には派遣教員が六名いますが、本年度四月に五名が入れ替わり、日々の学校活動を充実させていくだけでも精一杯なところがありました。このプロジェクトを当初から支援してくださっている当地に詳しい平岩コーディネーターの存在は非常にありがたいものです。平岩様にもこの場を借りて厚く御礼申し上げます。